

まず始めに私たちのプレゼンテーションの全体像について簡単に紹介します。

ここに示してあるのは、社会を構成する様々なセクターのうち主なものを整理したものです。ここでは大きさ順に配置してあります。重要度や影響力の並びではありません。もちろんこの図は単純化していますが、発表はこの図にあるような順番に沿って進んでいきます。全部で3つのグループによって準備されていて、盛りだくさんですけれども、全体としてこういった流れがあることを思い出しながら発表を聞いていただければと思います。

エネルギーについて

私たちはエネルギーについての取り組みの発表をします。まず日本の電力の現状、国の政策、企業の取り組みについて、市民の取り組みについても後ほど紹介します。

日本の電力状況

では日本の電力エネルギーの現状についてです。ところで、日本は自然エネルギーをどのくらい導入していると思いますか？ 計算の仕方によりますが、総発電量の約 0.3%です。ちなみに 2010 年の目標を 1.35%としています。太陽光発電に関していうと、日本は、今の時点で、世界一の導入率です。風力発電に関しては世界の 1%と少ないです。

日本のエネルギー政策

次に、日本のエネルギー政策についてです。

まず、日本の電力構成は原子力・石炭・天然ガスが主となっています。

エネルギー政策基本法では、「原子力発電は安全確保を大前提に基幹電源として推進していく」と示されています。そこで原子力発電の現状を見てみましょう。

日本には 53 基の原子力発電があります。ではなぜ、日本は原子力発電に力をいれようとしているのでしょうか？その理由は3つあります。

一つ目は他のエネルギーに比べて二酸化炭素の排出が少ないこと、

二つ目はエネルギーを安定供給しやすいこと、三つ目はプルサーマルを利用することで使用済み核燃料のリサイクルが可能であるためです。

ここでプルサーマルとは、ウランに使用済み核燃料から回収したプルトニウムを混ぜた混合燃料を原子力発電所で利用する発電方法のことです。

そして、2012年には原子力発電は電力構成の40%を占める見通しが立てられています。

個人的な見解では事故が起きた時のリスクが最も高いものに力を入れているようで、心配で仕方ありません。皆さんは持続可能なエネルギー政策をどのように考えますか？

エネルギー分野における企業の取り組み

では次に、エネルギー、特に電力についての企業の取り組みを紹介します。

発電についての取り組み 工場内に風車を立てて自家発電しているアサヒビールようなところもありますが、敷地の広さ、経費などからみて多くの企業がそのようにするのは現実的ではありません。そこでここでは、グリーン電力証書について取り上げます。グリーン電力は、自然エネルギーで発電された電気を選んで購入できるプログラムです。

付加価値を加えて、市場で競争力を持たせ普及させることが目的で 1990 年代にアメリカで生まれ、様々なプログラムがあります。日本では、一般家庭が自然エネルギーを選べるシステムはまだ導入されておらず、まだそれほど一般的ではありませんが、電力の自由化に伴い、証書

化されて、企業やNPOで購入するところが増えてきています。

消費エネルギー量についての取り組み

消費電力への取り組みはイメージしやすいと思います。各事業所において使う電気製品を省エネルギー型のものへと切り替えたり、こまめに電気を消すなどの省エネ活動が一般的です。

また、発電の際に放出される熱を使う、コジェネレーションシステムを導入するところも少なくありません。製品開発としては、ソニー、リコー、シャープなど家電やパソコンメーカーが、製品のライフサイクルを通して省資源、省エネルギーに取り組んでいます。リコーでは、コピー機を、従来機の半分のエネルギー消費で済むようにしています。これを可能にしたのが、これから蓄電のところで紹介するキャパシタというものです。

蓄電についての取り組み

キャパシタは何かを話すのは大変なので、ここでは簡単に電気を貯めるもの、としておくことにしましょう。バッテリーとの違いを簡単に表にしてみました。EcaSSとは日本の岡村研究所という会社が開発したキャパシタのことです。表を見れば分かるように、寿命の長さ、充電時間、電気損失率に大きな違いがあり、重金属を含んでいないことから害が少なく、量産されれば安価になります。これまでのキャパシタにはバッテリーより容量が小さいという問題点がありメモリーのバックアップなどの補助電源としてのみ使われていましたが、材料、構造の工夫などにより小型化、大容量化が進んでいます。既に導入されているものは、先ほどのコピー機の他に、日産ディーゼルが、NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）のプロジェクトでキャパシタハイブリッド・バスやキャパシタハイブリッド・トラックを発売しています。また、ホンダも燃料電池と併用した乗用車「ホンダFCX」を製品化しています。電気はためることができなかつたから常に発電しなければいけなかつたのですが、このEcaSSが導入されれば、42%の発電所は不要となると言われています。

企業の環境への取り組み

私達は企業の取り組みについて調べてきました。企業は、環境破壊の原因のひとつとして考えられてきました。実際に、1960年代の急激な工業化によって、私達は深刻な環境問題に直面してしまいました。エコロジーと経済の共存は難しいことなのでしょうか？私達は今あるものをすべて放棄しなくてはいけないのでしょうか？

でも、そんなことは不可能です。私達は単に今あるものを放棄することは出来ません。エコロジーと経済の共存はとても重要でことです。では、そのために私達は、何が出来るのでしょうか？

私達は、そのために、私達に意識とライフスタイルを変えることが重要なのではないかと考えました。日本では、環境問題が私達に生活の一部になっていません。人々は環境問題に対して、アクティブではないのです。環境を保護するための特定、効果的な対策などはありません。しかし、環境問題のような難しい問題に取り組んでいくためには、人々がひとつになって取り組んでいく必要があります。個人の活動だけでは、このような問題を解決していくことは出来ません。

こうした観点から、企業は私達の意識や、ライフスタイルを変えるための重要な役目を担っていると考えました。

企業が、経済の中であり、また私達の生活習慣、意識を形成するものという前提の中で、企業

は私達のライフスタイルや意識を変える力を担っているのであると考えました。確かに、企業はどのように利益を得るのかということを考えていく必要があります。しかし、お金とそして企業の成長は消費者である私達によって、決まるものです。

つまり私達は、消費者である私達と企業が、相互の影響しあっている中で、環境をよりよい方法へ導いていくために、環境を考慮している企業を評価していく必要があると考えました。

では、これから、3つの企業の事例をあげていきたいと思います。そして私達のプレゼンが、皆さんにとって、これから、どのようにこの問題に取り組んでいくかを考える機会になればいい名と思います。

では楽しんでください。

まず、世界でも有数の自動車メーカーである、TOYOTA について紹介します。

TOYOTA は、環境活動、特にエコ・カーに関する分野で、他の会社に先駆けて取り組みを始めました。それは、環境活動が経営戦略の上でも重要であることに気づいたからであり、同時に彼らのもつ技術によって、地球環境を改善へと導くことを目標としました。

今回は、TOYOTA の、3つの取り組みについて報告したいと思います。

一点目は、エコ・カーについてです。

TOYOTA は、エコ・カーの開発・製造の推進に取り組んできました。エコ・カーは、低燃料、低エネルギー、CO2 排出の低減を実現しています。

二点目は、社内のリサイクル委員会についてです。

トヨタは、1990年10月に「リサイクル委員会」を発足し、開発から廃棄に至るライフサイクル全体を考えたリサイクルしやすい自動車づくりを目指しています。開発では、リサイクルしやすい材料の開発をはじめ、取り外し性に配慮した設計などに取り組み、生産では、各種リサイクル技術の開発・導入を図り、販売店（使用）では中古部品の利用促進や修理のために交換されたバンパーの回収システムを構築し、使用済み自動車に対しては効率的な解体技術の研究を推し進めています。

三点目は、工場での取り組みについてです。

環境活動は工場レベルでも広範囲に及び、実施されています。設備への革新的省エネ技術の導入、生産ラインの集約化、新設ラインでの工程短縮などで、CO2 排出量が前年度比 4 万 t 低減に成功しました。廃棄物発生総量の低減、水洗工程の廃止、漏れ対策・循環化などを中心に水使用量低減活動を推進し、目標を達成しました。

また同時に、TOYOTA は、環境活動を CSR 企業の社会的責任であるとし、環境教育の普及も積極的に行っています。

現在、自動車は私たちの暮らしになくてはならない存在となっています。車無しの生活はもはや考えられないでしょう。しかし、車は確実に地球環境にとって悪影響を及ぼしているということも否めません。大企業の環境保全の取り組みのひとつとして、TOYOTA のような活動が行われていることを、広く知らしめ、また普及させていくことが必要であると思います。

次は日本の中小企業の環境対策を紹介します。先ほど紹介したように、トヨタのように大企業は環境問題に取り組んできています。もちろん、ますます多くの中小企業が環境問題に取り組む始めてはいます。環境の悪化は企業の責任であるし、問題に取り組むことはまた企業のコストを減らすことにもつながるからです。しかし、中小企業は資金があまり多くありません。だから、大規模に環境問題に取り組むことは難しいのです。しかし、これらの企業の中には、この問題をビジネスチャンスとして利用してしまっている企業もあります。

わたしたちはその一例として、チャフローズコーポレーションを取り上げようと思います。

彼らのスローガンは「ゴミは宝だ」というものです。これはどんな意味なのでしょう？考えていきましょう。

彼らの主な製品は「チャフウォール」と「チャフローズスポンジ」です。

まず、チャフウォールについてですが、これらは、ホタテの貝殻ともみ殻からできています。これらは健康に全く害を与えません。なぜならば、100%天然素材だからです。また、この壁はシックハウス症候群を減らし、家の臭いを抑えることができ、さらに抗菌、防火性まで備えています。みなさん、このチャフウォール、すごい壁だと思いませんか！？

次にチャフローズスポンジについてです。このスポンジもやはり、すべて天然素材でつくられています。たとえば、アシや、雑草、糸くずなどです。通常、糸くずの70%はゴミになります。しかし、このスポンジはこのゴミになる部分をリサイクルしてつくられています。また、普通のポリウレタンのスポンジは加工する際にフロンを、燃やすときにはダイオキシンを発生し、しかも、埋めても土に還りませんでした。しかし、チャフローズスポンジは有害物資を出すことなく燃やすことができ、埋めても土に還っていくのです。

これらは両方ともゴミからつくられています。地球からできて、地球に還っていきます。そう、だから、これらは持続可能な製品と言えるでしょう。

この企業は本社とたった2つの工場しかありません。しかも、本社で働いているのは8人だけです。しかし、その資本は実に3億円もあります。彼らは多くの資本を得ています。私はとても驚きました。彼らは本当にゴミを宝に変えてしまっているのです！

次に、向山塗料株式会社の環境への取り組みについて話したいと思います。

向山塗料株式会社は塗料の小売業者です。会社には17人の社員がいます。とても小さな会社です。しかし、その総売上げは年間10億円（1000万ドル）になります。

この会社の経営方針は、“母なる地球の環境に満足してもらえる経営・考え方”です。それに基づいて、会社では売上げ削減という目標を掲げています。その目標とは、毎年、前年に比べて8%の売上げ削減をするというものです。すでに9年の間、その努力が続けられています。

なぜ、売上げを減らすのでしょうか？一般的に、会社の目標は売上げや利益を増やすものと思われています。だから、私たちはこの会社の売上げ目標を不思議に思います。あなたは、どのように思いますか？

その理由は、この会社が自給自足の会社を目指しているからなのです。それでは、どうやって売上げを削減することで自給自足の会社に行っているのでしょうか？

会社の経営方針は、“地球を自分達が住めないようなところに変えてしまうなら、お金を稼いでも意味がない”というものです。

そこで、最初に、会社では資源の無駄遣いをやめました。例えば、電気やガソリンなどです。その結果、会社の年間の経費を減らすことができました。その額は1500万円（15万ドル）になりました。この会社の売上げの利益率は5%であることから、1500万円は3億円の売上げに相当します。例え、3億円の売上げを減らしたとしても、まだ会社は会社の利益や社員の給料を確保することができるのです。

そして2番目に、会社では勤務時間を減らそうとしています。週に5日の勤務時間を週4日に変えようとしています。すると、勤務時間のかわりとして社員は農業をする時間を得ることができます。すでに会社では、3年前から畑を借りて野菜を育てています。社員は、仕事の前後やお昼休みにそこに行って農業をしています。この会社は、食物における自給自足を目指しているのです。完全に自給自足をすることはとても難しいことですが、社員は自分達のできることを行っています。

また、会社では、きつい仕事をする必要がありません。なぜなら、会社の売上げや社員の勤

務時間を減らしているからです。社員は、快適に働くことができます。このことは、“会社全体の幸せ”につながります。この意味は会社の社員全員が幸せであるということです。会社にとって、これはとても大切なことです。よいサービスを提供するには、社員自身の幸せが必要であるからです。

結論としては、向山塗料株式会社の社員は、彼らの生活を通して、環境問題に対する努力をしているということです。私たちはそう思うのです。

20世紀、多くの企業が美しい自然を犠牲にして、利益を得てきた。

現在の私たちの生活は、地球からの“借金”の上に成り立っているといえる。

私たちは母なる地球に、その“借り”を返さねばならない。

これまで、私たちが大企業に対して持つ強いイメージは、“大量生産大量消費”であった。しかし今日、私たちはTOYOTAの例に見るように、大企業でも環境への負荷を減らすことができるという可能性を見出した。企業の環境活動というものは、企業経営の中では重荷であるという考え方が一般的であったが、環境活動から利益を得る会社というのも多くあることを知った。

環境活動よりも、利益追求を優先するというのは、企業にとって当然のことであると思う。“向山塗料”は特殊な例であるけれども、彼らは地球環境を守ることで多大な利益を得ているのだ。

私たちは、更に多くの企業が地球環境について考えるようになってくれることをのぞむ。

21世紀の幕開けである、今このときが、“私たちが何をすべきか”、また“私たちに何ができるのか”を再考する時間なのではないか。

企業が、私たちに対し、環境保護への正しい道筋を示していつてくれることを期待する。

私たち、すべての地球市民は、企業が環境と、経済の両面を考えることが当然なのだという社会を作っていかなければならないし、また環境活動を積極的に推進する企業を高く評価していく必要があるだろう。

市民の取り組み

菜の花プロジェクト

それでは、市民の取り組みとして菜の花プロジェクトについてお話します。

琵琶湖の合成洗剤によるリン汚染への対策として1986年の廃食油のリサイクル運動が菜の花プロジェクトの発端でした。この活動は滋賀県生協から始まり、琵琶湖の汚染原因の一つである廃食油をリサイクルしてせっけんをつくる運動でした。

これには2つのメリットがあります。1つ目は汚染原因である廃食油をすぐに削減することができること、2つ目はせっけんが合成洗剤よりも環境への負荷が少ないことです。しかし、企業の「無リン」の合成洗剤開発により多くの廃食油が余ってしまいました。

せっけんを作る方が手間が掛かってしまうためです。そんなところ、ドイツでのナタネ油プロジェクトを知りました。

ドイツではナタネ油から軽油の代わりに使用可能なBDF(バイオディーゼル燃料)を作っていました。ここに新しいリサイクルシステムができました。

さて、BDFとは何のことでしょうか？BDFとはバイオディーゼル燃料のことで、パーム油、大豆、ナタネ油などの家庭から出されるもので造られる代替燃料のことです。

その性質として、有毒物質でないこと、生分解性であること、硫黄や芳香族化合物が殆ど含まれないこと、他の燃料に比べてCO₂排出量が少ないことがあげられます。

その量は1マイル当たりで比較するとガソリンやディーゼルの半分以下にもなります。温暖化対策にも成り得るかもしれません。

さて、この菜の花プロジェクトの循環サイクルではまず菜の花を栽培し、それから菜種油を搾取し、食用油として使います。その後、廃食油を回収して、精製し、バイオディーゼルとなります。このバイオディーゼルは車や農作業、漁業用機械の燃料として使えます。

この活動は各地に広がり、毎年菜の花サミットが開かれています。

このように、菜の花プロジェクトは市民による循環型社会への重大な第一歩といえると思います。

以上、私たちは国、企業、市民の取り組みを紹介しました。今の時点で国の取り組みは良いものとは言いがたいけれど、それらの取り組みのどれかが1番重要というのではなくて、色々なレベルでの取り組みがあることが重要だと感じています。

日本人の考え方とライフスタイルについての発表をはじめます。

あなたにとって自然とは何ですか？

今日、私たちの周りにはたくさんの環境問題があり、私たちはそれらの問題に対してそれぞれの価値や文化を基づく違った考え方を持っています。誰も自然を無限のもの、そして自然とは無関係だとは考えないでしょう。しかし、自然は人類によって破壊されており、その破壊はスピードを増し、より暴力的になってきています。

なぜなのでしょう？私たちは自然と共存することはできないのでしょうか？

いいえ、できます。しかし今一度、私たち自身の生活を振り返る必要があります。もはや人類が技術や力で自然を管理する時ではないのです。

そこで、私たちライフスタイル班は、環境問題に取り組むためのはじめの一步として、私たちの自然に対する考え方を変え、リセットすることができる、と提案します。

最初に、日本人の自然観についてお話しします。

昔の日本人の生活から学んでいきたいと思います。

次に、寸劇「心のこもった、ありがたい、上手な料理」をお見せします。

最後に実生活に結びついたスローライフ、スローフードを紹介します。私たちは一ヶ月間、スローライフ、スローライフを試してみました。

自然観について

目的：伝統的な日本人の自然観を振り返り、現代社会における自然観と比較する

日本人は早い時期から農耕民族でした。狩猟をするだけでなく、作物を育てるということは彼らにとって生きるための不可欠な手段でありました。日本は自然の恵みが豊富です。複雑な地形や四季、そして高い降水量は安定した米やその他農民が栽培できるような様々な作物を供給してくれました。

しかしその一方で、日本人は台風や地震、大雪などの、作物に弊害を与える自然災害との戦いを強いられてきました。そのため彼らは自然を偉大なもの・神聖なものとして認識し、共存のために「感謝」してきました。自然から沢山の恩恵を受けたときには、彼らの感謝の念を表すために、収穫祭などを催しました。これらが伝統的な日本の自然観であり、昔の日本人は自然を崇拝し、「自分達はその一部である」という認識を欠くことのないように生活してきました。

しかしながら、この伝統的な自然観は明治維新と共に消えてゆきました。日本の現代社会は「経済発展」という名の下に、自然を破壊し続けています。私達は今、この昔の日本人が持っていた自然に対する考え方を取り戻すために、我々の現代社会へ核弾頭を落とさねばならない時期にきているのではないのでしょうか。

スローライフ寸劇：

嫁が台所で料理をしている

嫁 「大根の葉っぱはいらないから捨てよう。

魚も頭と尻尾は捨てちゃえ」

嫁の料理を見かねた婆が登場

婆 「こら!大根の葉っぱはごま油で炒めたら、おいしいふりかけになるんじゃぞ。

魚だって、南蛮漬けにしたら丸ごと食べられるんじゃ。」

嫁 「え! そうなの」

婆 料理しながら、

「昔から、食材は無駄なくなんでも料理にしてきた。

それを見た目が悪いからとか、料理がめんどくさいからと捨ててはバチが当たるぞ。

大根だって、農家の人が種から丹精こめて作ってくれたもの。

魚だって漁師さんが命かけて捕ってきてくれたものなんじゃ。

ひとつ一つ大事にせにゃあかん。お米一つにだって神様は宿っとんじゃぞ」

料理完成。それを食べる嫁

嫁 「ん! おいしい。大根の葉っぱもこんなにおいしくなるんだ」

20 世紀、我々「現代人」は、迅速性、利便性、合理性などを求めてきました。しかし、今、我々はそれらがもたらしたゆがみと直面しています。それが、いわゆる地球環境問題です。

これまで日本人の伝統的な自然観や慈しみの心を紹介してきましたが、私たちのような現代の日本の若者は、それらを持ち合わせているとはいえません。地球環境問題に直面している今だからこそ、私たち若い世代が、それらを振り返ってみる価値があるのだと思います。伝統的なものの見方が、私たちの生活を豊かなものにしてくれるかも知れません。

伝統的な日本人の自然観を学び、私たちは、私たちにりのスローライフを実践してみることになりました。

では、私たちの実践したスローフード・ライフを紹介します。

まず、スローフードの例ですが、できる限り外食を控え、自炊を心がけましたり、学校に弁当やお茶を作って持って行ったりしました。スローフードの実践によって、食材の一つ一つについて、品質、生産元等を考え、じっくり味わうことができました。またこれは、節約にもつ

ながることになりました。

次に、スローライフの例ですが、その一つとして、こまめにテレビのプラグを抜きました。テレビを見る代わりに、読書をする時間が増え、有意義な時間を過ごせたように思います。

また、部屋や風呂で電気を消し、キャンドルライトを楽しみました。都心では月明かりを楽しむことができず、とても残念に思いましたが、この実践でその日一日を振り返り、一日一日を尊く感じることができました。

また、ある班員は、大学まで自転車や電車を使わず、徒歩での通学を心がけました。普段何気なく生活している街並みがどこか違って見え、道端に咲く花や絶えず変化する空の様子に小さな喜びや感動を味わえました。朝は忙しいという方も、帰り一区間でも夕焼け空を楽しんでみてはいかがでしょうか。

私たちは、これらを通して身の回りのことを貴重に思い、小さなことにさえ喜びを感じることができました。以上は、「私たちの」スローライフです。ぜひ、「あなた自身の」スローライフを実践してみてください。できることから始めましょう。

では、私たちのプレゼンテーションを振り返ってみます。

まず、伝統的な日本人の自然観を紹介しました。カンザスの皆さんに紹介すると同時に、私たちも、祖先がどんな風に自然と関わっていたのかを振り返ることになりました。

次に、スキットをお見せしました。日本人の自然観と慈しみの心を、ご理解いただけたでしょうか。

さらに、私たちなりのスローライフを紹介しました。慈しみの心が豊かな生活に繋がっていることを、身をもって体験できました。

もっと速いものを！もっと新しいものを！そう望んだら限はありません。だからこそ、私たちに必要なのは、価値観の変化なのだと思います。

環境問題の解決のために、現代生活の中で、我々に何ができるでしょうか。人間が自然とうまく付き合っていた時代の自然観を見つめなおし、価値観を変化させていくことは、この難しい問いに対する一つの答えになりうるかもしれません。

さあ、私たちが最初にした問いをもう一度。

あなたにとって、自然とはなんですか？

全体のまとめ

これで私たちのプレゼンテーションを終わります。カンザスのようにしっかりした結論はありませんが、様々な分野がそれぞれに環境への取り組みを行っていることがわかりました。そして、その多様なそれぞれの取り組みこそが大事だと思います。カンザスの皆さんのプレゼンとの共通点もあったと思うので、相違点とあわせて次のセッションで話し合しましょう。

グラハム先生からの講評：

ありがとうございます。まとまった講評ではありませんが、気がついたことをいくつかお話しします。

日本の学生のみなさんの発表、興味深く聞かせていただきました。これまで日本に滞在してきたカンザスの学生にとっても身近に感じられたことと思います。例えば、エネルギーに関連し

てみますと、京都では（グリーンアクション）という原子力発電に反対するNGOを訪問しました。

そのNPOでは、「もんじゅ」のような高速増殖炉の危険性についてお話を伺いました。そのNPOは何年にも渡って、訴訟をしていたのですが、残念なことに敗訴してしまいました。特に、発表者の方が原子力発電の行く末を心配しているというお話がありましたが、私も同感です。ここで伺いたいのは、原子力発電に対する不安がどれぐらい一般的なものなのか、特に若い人たちの間での状況を聞いてみたいと思います。また、自分たちがどのようにして政府の政策を変えることができるのか、そういう話をお伺いしたいと思います。

それから、キャパシタについても大変面白いと思いました。このキャパシタは日本あるいは他の国で、どれぐらい普及しているのですか？とても重要なテクノロジーだと思います。

また、企業についての発表ですが、もちろんトヨタは誰もが知っている企業ですが、特にチャフローズ、向山塗料といった中小企業がとても面白いと思いました。どうやってこのような企業を知りましたか？またこの企業の商品は日本にどれぐらい広まっていますか？

たまたま昨日私たちは平塚市にある、関西ペイントの工場を見学しました。そこでどのように生産が行われているか、お話を聞きましたので、その大きな工場のやり方と今日の発表を比較してみると、とても面白いと思いました。

それから菜の花プロジェクトの話もとても面白いと思いました。バイオ燃料の話ですが、バイオ燃料はアメリカでも人気が高まってきており、大豆やトウモロコシ栽培など、農業が盛んなカンザスではとくにそうです。私たちの農業グループも、実はこの問題を取り上げたかったのですが、時間が足りずに断念しました。日本チームが取り上げたことはとても面白いと思いました。

バイオ燃料がよいものだと考えているアメリカ人はたくさんいます。ですが、中には問題点を指摘する声もあります。コスト効率の面からどうであるか、また燃料の製造地点から使用地点までの運送コストを含めると効率は下がるのではないかと指摘する声もあります。このような理由からバイオ燃料に反対する人もいますが、日本では反対の声が上がっていないかどうかということです。

最後に、スキットですが、とても楽しませていただきました。特に興味を持ったのは、スローライフの話です。日本、とくに東京はみんなが早いペースで動いているのですが、このスローライフはどれぐらい指示されていますか？若い人の間では人気がありますか？

いずれにしても、スローライフの話はとても面白く、興味深いものでした。アメリカで同じような動きがあるかどうかはわかりませんが、自然の美しさを楽しんでいることを知りとてもうれしく思います。